書評

10冊の本から見える、嗜好品世界の広がり

武庫川女子大学教授
藤本 憲一

広義の嗜好品領域の話題を、ブックレビューを通じて語る。本来であれば威勢よく最新の嗜好品関連書時評といきたいところだが、多くの新刊に目を通せているわけではないので、復刊も含むここ数年の嗜好品関連書の動向まで、範囲を広げて論じることをお許しいただきたい。

ジャンルとしては、まず経口品から非経口品の順に、食品の嗜好性の話題から始まって、体感的な嗜好体験から文学へ。締めくくりはたばこや酒など、狭義の嗜好品の話題へという順で触れていきたい。

＊　＊　＊

(1) 上原善広『被差別のグルメ』新潮新書（2015）
(2) 内澤旬子『世界屠畜紀行 THE WORLD'S SLAUGHTERHOUSE TOUR』角川文庫（2011 原著 2007）
(3) 速水健朗『フード左翼とフード右翼——食で分断される日本人』朝日新書（2013）
(4) 畑中三応子『ファッションフード、あります——はやりの食べ物クロニクル 1970-2010』紀伊國屋書店（2013）
(5) 宮沢章夫『東京大学「ノイズ文化論」講義』白夜書房（2007）
(6) 安西信一『ももクロの美学——〈わけのわからなさ〉の秘密』廣済堂新書（2013）
(7) 高野秀行『イスラム飲酒紀行』講談社文庫（2014, 原著 2011）
(8) 高野秀行・清水克行『世界の辺境とハードボイルド室町時代』集英社インターナショナル（2015）
(9) 獅子文六『コーヒーと恋愛』ちくま文庫（2013, 原著『可否道』1963）
(10) 寺田寅彦『コーヒー（珈琲）哲学序説』青空文庫（2003, 原著 1933）

＊　＊　＊

まずは、食品の嗜好性（好き嫌いの選好や偏り）に触れた3冊から、取り上げてみよう。

(1) は、『日本の路地を旅する』文春文庫（2012, 原著 2009）で大宅壮一賞を受賞した著者による、先に話題を呼んだ海外編の『被差別の食卓』新潮新書（2005）の続編に当たる。前書同様、過去・現在において差別・抑圧されてきた人々のソウルフード（単なるB級グルメとは一線を画す、被支配・底辺階層固有の料理文化）のフィールドワーク調査に徹している。本来、普通の市民が口にせず、廃棄してきたような食材や部位を、やむなく貧しい人々が知恵と工夫で、オリジナルな食文化に転用するクリエイティビティ、いわば食嗜好のポリティックスの逆転可能性に注目する。

たとえば、ケンタッキーフライドチキンは、そうしたアメリカ被支配階層のソウルフードがチェーン化したものであり、ブラジル料理の代表フェジョアーダ（豆と肉の煮込み）もまた、最貧民の窮余のごった煮が、国民食へと昇格したものだ。韓国や日本の焼肉・ホルモンもまた、そうであるという。

こうした嗜好のポリティックスにおける下克上というか、周縁と中心の逆転メカニズムを、自らの被差別地区出身者という出自を根っこに据えて、たんねんにルポしていくところが、上原氏の持ち味である。

一昔前の博多もつ鍋の国民食化に続いて、近年の流行で言えば、「かすうどん」の名脇役、アブラカス（牛の腸をカリカリになるまで炒り揚げたも

の）は、まさに上原氏が子供の頃によく知っていた大阪の被差別地区固有の食べ物が、急速に国民食として普及したものだ。当時は貴重だった油(脂)を取るために腸を煮た結果、残った副産物、まさに「アブラを取った後のカス」を、捨てるのがもったいないと食材化したところから、始まるようだ。著者は、伊勢・鳥羽のカメ、沖縄・久高島のイラブー（海蛇）、粟国島の「ソテツ味噌」から、かつて北海道のアイヌや、旧樺太に住む「日本人」だったウィルタ（オロッコ）・ニブフ（ギリヤーク）の食文化まで、訪ね歩いていく。

(2) は、上原氏のソウルフードの世界分布を裏打ちするような、衝撃のルポ。かつてイラスト・エッセイの名手といえば妹尾河童であったが、今日、からだを張った現場取材と、微に入り細をうがつイラストで、内澤旬子氏が第一人者かもしれない。

東京の豚・牛、沖縄のヤギ、韓国の牛・犬、バリ島の豚、エジプトのラクダ、イラン・モンゴル・インドの羊、チェコの豚、アメリカの牛…、世界の屠畜（つぶし）行為に肉薄し、ときに自ら手を出してまで、獣肉の旨さと残酷さ、崇高な供犠と賤民差別が同時に生まれ出る原点を描いている。

(3) もまた、食嗜好のポリティクスをめぐる、鋭い問題意識の書。多彩な評論活動で知られる速水氏によれば、日本の食の政治学は、ファストフードやコンビニ食など、安くてグローバルな国際標準食を志向するフード右翼と、エコや健康、自然食を志向するフード左翼に、二極化しているという。

速水氏の分析に耳を傾けているうち、「これはもはや右や左といった政治の次元を超えて、宗教の次元に踏み込んでいるなあ」と痛感した。その感慨は、当方がレギュラーメンバーとして参加する味の素食の文化フォーラムにおける議論でも、確認することができた。世界の宗教的戒律の違いがもたらす食の嗜好の差と、一見無宗教に見える日本の食文化におけるタブーは、あんがい酷似しているのだ。すでにローフードやビーガンといった食の極左主義は、極端な宗教的境位に達している。日本では、排外的な食の差異から、まさに今ここで新宗教が生まれつつあるのだ。この点については、**南直人編『宗教と食（食の文化フォーラム）』ドメス出版（2014）**参照。

(4) はうって変わって、ポピュラーカルチャーとしての食を捉えることで、やはり食嗜好を論じた書。すべての食文化は、流行という嗜好に乗っかっているのであって、まさに速水氏的に言えば、極右のグローバリズムから見たフード・ポリティクスだ。しかも、インスタントやコンビニ食品群から、ラーメンやスイーツ、スシにカフェ、ご当地B級グルメまで、日本は世界の流行を牽引する「情報消費としての食（ファッションフード）」の最先端基地となっていることがわかる。

この日本のファッションフードの対極にあるのが、戦地にありながら、日常と同じ食の嗜好を維持しようとする人々の不変の営み。**酒井啓子『イラクは食べる――革命と日常の風景』岩波新書（2008）**では、独裁や戦時下、イスラム教の戒律といった当方らの固定観念にもかかわらず、「乾燥ライムは飲み物としてだけでなく、むしろ料理に多く使われる」など、健全で根強い嗜好のゆるぎなさを伝える。

同じく、**内田洋子＋シルヴィオ・ピエールサンティ『トマトとイタリア人』文春新書（2003）**では、南米原産のトマトがイタリア人の嗜好を塗り替え、**小林貞作『ゴマの来た道』岩波新書（1986）**では、アフリカ原産のゴマが、中東・インド・中国など、遠い道のりを経て日本に達しただけでなく、嗜好食品や調味料として、全世界の味覚や嗜好に大きな影響を与えた点が指摘される。

＊　＊　＊

(5) は、音楽を中心とした嗜好体験とは何かにヒントを投げかけてくれる書。戦後地下文化（アングラ）シーン、サブカル・シーンを事例に、ノイズとは何かを後半に展開する。よく知られるように、ノイズとはただの不愉快な騒音、無意味な雑音ではない。この本では、一貫して「近代社会から排除される異形のもの」と、「ノイズ」を定義づけた上で、論じている。メタファーとして、楽音 vs ノイズ、栄養必需品 vs 嗜好品という対立図式は、成り立つのか？　宮沢氏は、ジョン・ケージの『4分33秒』やフルクサス、未来派、ジャン・

ナイマンの音楽行為を紹介しつつ、「すべての音は音楽である」「すべてのノイズが音楽である」というテーゼに到達する。ひそかにアルバート・アイラーと並んで、当方も若い時に愛聴していた"暴力温泉芸者"中原昌也や、"メルツバウ"秋田昌美、さらに佐々木敦の評論や**青山真治監督『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』（2005 バップ）**を縦横に参照しながら、ノイズの向こう側に「救済の音楽」を見出そうとする。

はたして、われわれもまた、「近代社会から排除される異形のもの」＝「嗜好品＝ノイズ」の向こう側に、救済を見出せるだろうか？

なお、ノイズ文化論の哲学的・情報メディア論的な意味については、**ジャック・アタリ『ノイズ――音楽/貨幣/雑音』みすず書房（2012）、ミシェル・セール『パラジット――寄食者の論理』（法政大学出版会 1987）、藤本憲一「モバイル・メディアの"三叉路モデル"――"コミュニケーション神話"の二つのドグマ」（富田英典編『ポスト・モバイル社会』世界思想社（2016）**所収）等を参照されたい。

（6）は惜しくも早世した気鋭の美学者による、異色の音楽美学の書。この本を一読して、感動した当方が安西氏に早速連絡を取り、当方が主宰する情報美学研究会に来ていただける約束を取り付け、メールのやり取りで盛り上がっている研究会の一ヶ月前に、とつじょ新聞紙上で、安西氏が急逝された事実を知り、大きな衝撃を受けたのが、まだ 2 年前である。イギリス式庭園美学、環境美学ほかの手堅い研究で知られ、ジャズ・フルート奏者として鳴らした安西氏が、一方で少女 5 人組のアイドルグループ「ももクロ」（ももいろクローバーZ）の追っかけ（通称「モノノフ」）として、舌鋒鋭く言挙げしたのが、**（6）**である。それまでの氏の論文に比して、ほとばしるような饒舌な文体は生命力にあふれ、ノリと感情のおもむくまま、書きなぐった、いや吠えまくっているような文体である。古今東西の音楽に造詣の深い美学者によるクールな評論ではなく、一個の「モノノフ」としての熱い魂の叫びなのだ。

安西氏いわく、「私だって 50 過ぎのオヤジだ。今さら少女アイドルにハマる歳でもあるまい。しかも美学芸術学という学問を、東大で偉そうに教授している。その面子にかけて、多少の擬似芸術で感激するわけにはゆかぬ。のみならず私は、ジャズ・フルーティストとしてライブ活動を行う身でもある。小娘の J-POP ごときに降参するなど、演奏家としてのプライドからして、許されてよいはずがない。／だがしかし、駄目なのだ。いくらそう抵抗してみたところで、泣けてしまう。ももクロのライブを観ると、不覚にも涙が抑えきれなくなってしまう。繰り返し、ときには号泣する。…〈わけのわからなさ〉こそが、ももクロの魅力なのだ」という。これはキリスト教神学で言うところの「知 vs 信」の対立を超えた、「不条理なるが故に我信ず（credo quia absurdum）」という言葉そのものである。ももクロの何が、理性を超えた純粋信仰の道へと、学究の徒・安西氏を走らせたのか？　その力づくの自己分析というか、ガムシャラな筆致での信仰告白こそが、本書の魅力であり、きわめて信頼性が高い。安西氏は、身体性や演出術、成長の要素や日本文化とからめて、論じていくが、この不合理なもの（に惹かれる自分自身）への探求、きわめて世俗的な商品や俗悪な体験への信仰告白という点で、氏のももクロ研究は、われわれの嗜好品研究とまったく同じアスペクトをもっていた。まったくもって、惜しい方を失ったと痛感する。

＊　＊　＊

さて、いよいよ狭義の嗜好品の話題に移ろう。

（7）は、自分のからだを張った体験的研究。魂のフィールドワーカーとして、上原氏や内澤氏、安西氏と同じく、かねてから当方がリスペクトする"辺境作家"、高野氏の書。一昔前の社会派気取りの凡百の自称ジャーナリストたち（そのくせ後から平気で虚言を告白したりする）と違って、その筆致はいつも楽しく、常に半分ふざけているように見える。マジメな読者からは、「興味本位のもの好き探検家」として誤解されたり、蔑視されがちだと思う。しかし、当方にはわかる。つねに社会派気取りのエエカッコシイのエセ正義派とは一線を画した、そのしなやかな姿勢こそが、同志として信頼するに足る。それは、テレビによく出てく

る「戦場カメラマン」（モドキ）は100%インチキだが、つねに半分ふざけている筆致の関西弁カメラマン、宮嶋茂樹氏が信頼できるのと同じだ。現場体験を心から愛する、しなやかな知性の持ち主は、つねに身体を張り、ユーモアと含羞をたたえつつ、語りかけてくるのである。

高野氏は、雪男など UMA（未確認生物、モンスター）をふざけて追いかけているようでいて、行く先々のフィールドワークの現場記述には、嘘がない。自称「戦場カメラマン」や、お堅い文化人類学者たちには絶対書けないような、リアルなルポを、世界各地から軽やかに送ってくる。

この **(7)** では、禁酒が大原則のイスラム各国、イラン、アフガニスタン、シリア、ソマリランド、パキスタンで、ひたすら飲酒機会にチャレンジする。タクシー運転手に穴場を聞き、現地のキーマンを訪ねては、建前の裏にある本音の飲酒習慣をあぶり出していく。一見、カタそうで、実は柔らかい（酒を入手しやすい）国もあれば、柔らかそうに見えて、ちょっとタイミングを外せば、まったく外国人には酒を入手できない文化圏もある。イスラム国やシリア紛争をめぐって、何かと不可解なイスラム教圏だが、こうしたアルコールをめぐるせめぎあいを見て、イスラムの多様性がうかがえる。また、仏教圏では通常、酒がふつうに手に入るが、本来の戒律的には、飲酒は仏教五戒のうち「不飲酒戒（ふおんじゅかい）」で禁じられる重罪である。なのに、なぜ仏教徒は、お酒を飲むのか…と、問いは自分に跳ね返ってくる。

また、イエメンでは、現地でもっともポピュラーな嗜好品、カート（葉をクチャクチャ噛むことでトリップ感を楽しむ、別名チャット）に高野氏自らハマってしまう。「日本では朝から飲酒を認めてくれるところは少ないが、ここでは一日中、ほしいときにカートが食える。まるで天国のようで、私は酒のことなどすっかり忘れてしまった」と言いつつ、密造酒が手に入ると、すぐさま口にする正直さ！

今から20年前には、同じ著者の**『アヘン王国潜入記』集英社文庫（2007, 原著1998）**のとおり、ミャンマー辺境、反政府ゲリラの支配する麻薬原料植物ケシ）栽培地帯で長期フィールドワークに当たり、自ら収穫や生産に携わるうち、ドラッグ中毒に陥ってしまう。ここでは、麻薬生産者と消費者の現実が、肌身の感覚でリアルに描写されている。

まさに、彼のフィールド記録は、21世紀版の「ドン・ファンの教え」ともいえよう（幻覚性のキノコ服用による、体感的な記述の古典の書、**カルロス・カスタネダ『呪術師と私――ドン・ファンの教え』二見書房（1974）**参照）。

率直な記述もそうだが、ファンにとって高野本の最大の魅力は、従来の固定観念にとらわれない、縦横無尽のメタファーや、オリジナルなモデル構築だ。たとえば、**『ミャンマーの柳生一族』集英社文庫（2006）**では、ミャンマーの軍事政権を日本の幕藩体制と見立て、その体制の監視役を柳生一族と見立てることで、ユーモラスかつリアルな社会批評をおこなう。ちなみに同書の探検の相棒は、ワセダ探検部の先輩、故・船戸与一氏と超豪華！「辺境面白珍道中記」と謳いながら、**『アヘン王国潜入記』**と併せ読めば、凡百の社会派ミャンマー論からは抜け落ちた、「嗜好品から見た世界のリアル」が浮かび上がる。

高野氏と違って、政治・外交が舞台となるが、大宅壮一ノンフィクション賞受賞の**佐藤優『自壊する帝国』新潮文庫（2008, 原著 2006）**でも、ソ連邦末期、まさに体制変動期ロシアにおける、酒（ウォッカ）まみれの思春自伝の中で、「嗜好品から見た世界のリアル」が活写される。このジャンルにおける、数少ない信頼のおける書き手の一人であろう。ロシア外交が、ウォッカなしに成り立たない点が、身にしみて体感できるのだ。

(8) は、"辺境作家"かつ"嗜好品世界の水先案内人"、高野氏が独自のメタファーやモデル（たとえば「ミャンマーの柳生一族」モデル）を検証すべく、同じくイマジネーション豊かな中世史家と対談した書。この独自のメタファーやモデル構築力を発展させ、同じく現場感覚にあふれた中世史家・清水克行氏（**『喧嘩両成敗の誕生』講談社選書メチエ（2006）ほか**）と、縦横に論じ合ったのが、**(8)** である。例によって、ややふざけたパロディ本のようなタイトルだが、よくある××な「有名文化人対談本」と違って、大変中身が濃い。読み

終わるのを惜しみつつページをめくったのに、あっという間に読了してしまった。

世界の辺境と、日本中世には驚くほど共通点が多い事実が、次々に明らかにされていく。むしろ現代日本社会はじめ、西欧／近代化した特殊な一部の社会をのぞいた大半の世界は、今も日本中世のように、中東の紛争国のように、今も昔も、津々浦々まで中央政権の秩序が行き届くということはなかったのかもしれない。たとえば、日本の室町時代の社会と、ソマリア社会は、いろんな点で「かぶりすぎている」という。

いくつか、つまみ喰いしてみると、今も韓国やアジア諸国で文化摩擦を引き起こす犬肉食の問題。犬肉を食う行為は、日本中世でも現代アジアでも、マチズモ（マッチョ主義）と大きな関わりがあるという。日本中世では、「かぶき者は犬を食べる」ことを誇示し、逆に普通に今も犬肉を食う「ベトナムでも女性は犬を食べない」という。また、世界的に見て、現代日本人の新米好きは特異で、日本中世でも現代アジアでも「古米の方が新米より高価」「古米の方がさくっと軽やかでおいしい」という。ついでにいえば、現在、世界中に出回る中古車が日本製なのは、「中古車の値段が下がるのは日本だけ」だから。

嗜好品で言えば、イスラムの禁酒と違って、江戸時代たびたび出された「禁酒令は食料米確保のため」というプラグマティックな理由によるものだという。まさに、目からウロコが落ちる。

＊　＊　＊

続いて、嗜好品の文学。たとえば、山本文緒には、そのものズバリ「嗜好品」というタイトルの短編小説がある。**『ファースト・プライオリティー』角川文庫（2005, 原著 2002）**所収の一品だが、ここでの嗜好品は、男女間の小道具として、たばことマリファナがさらりと描写されている。

また**（9）**は、文庫復刊をきっかけに原著から50年ぶりに再評価された小説である。獅子文六といえば、ユーモアあふれる戦後軽文学の代表選手だが、この小説は、著者がコーヒーに凝りすぎ、ストーリーに懲りすぎて、体調を壊すまでに掘り下げたことを告白している（付録**「可否道について」原著 1965**）。

「東京のコーヒー通5人が集まって可否会というのを結成」したという、同好の士の交遊やら男女の機微やらを軽やかに描きながら、たしかに哲学論文のように、著者はストーリーの随所で、多くの嗜好品仮説を投げかけている。

●「心理！／コーヒーのいれ手の気持まで、味を支配するのだから、かなわない」（19 頁・いずれもちくま文庫版より）。

●「コーヒーを味わう目的は、俗念を洗うためであり、清澄な感情と思考を喚起して、自己の人生を高めるためと、信じてる。コーヒーをいれる方法が芸術だとするならば、飲む目的は、宗教に近いと、考えてる」（16 頁）。

●「そこまで、コーヒーのことを考えてるのは、欧米人にはいないだろう。彼等はコーヒーを飲むだけで、心で味わおうとする奴はいない。コーヒーのいれ方だって、今では、日本の方が、水準が高いんだ。アメリカ人なんか、東京のコーヒーを飲んで、腰をぬかしてるよ。もう、コーヒーの本場は、日本だね」（16 頁）。「…コーヒー通とか、コーヒー・マニアの数は、案外、日本の方が、多いのである」（84 頁）。「コーヒーだって、日本人の手にかかれば、口が飲むのではなく、心が味わう思考物となりうる」（85 頁）。

●「ヒットラーは、コーヒーというものを、軍需品と考えていたらしいんだね。なぜというと、コーヒーは兵隊の士気を昂揚するのみならず、家庭の士気も…」（42 頁）。

●「茶道に名器があるごとく、コーヒー道具の美術化、骨董化も可能であり、茶室、茶庭、茶がけ（かけもの）があるごとく、コーヒーを飲む部屋の特別な建築、造園、装飾品の創造まで考えている（85 頁）。

こうした具体から高邁な範囲に及ぶ、嗜好品哲学の命題は、古くは**岡倉覚三（天心）『茶の本』岩波文庫（1961, 原著 1906）**や、近くは、**（10）**に対する著者なりのアンサーだと思われる。

（10）は、寺田寅彦自身の幼少期の興味深いコーヒーとの出会いのエピソードから始まる。牛乳が飲めない子供の頃の彼に、医師が与えたのだ。寺田の言葉を借りれば、「牛乳は少なくとも大衆一般

の嗜好品（しこうひん）でもなく、常用栄養品でもなく、主として病弱な人間の薬用品であった」。当時、牛乳もコーヒーも薬用だった。

「始めて飲んだ牛乳はやはり飲みにくい"おくすり"であったらしい。それを飲みやすくするために医者はこれに少量のコーヒーを配剤することを忘れなかった。粉にしたコーヒーをさらし木綿（もめん）の小袋にほんのひとつまみちょっぴり入れたのを熱い牛乳の中に浸して、漢方の風邪薬（かぜぐすり）のように振り出し絞り出すのである。とにかくこの生まれて始めて味わったコーヒーの香味はすっかり田舎（いなか）育ちの少年の私を心酔させてしまった」という。

話題はコーヒーだけでなく、嗜好品全般に及ぶ。「酒やコーヒーのようなものはいわゆる禁欲主義者などの目から見れば真に有害無益の長物かもしれない。しかし、芸術でも哲学でも宗教でも実はこれらの物質とよく似た効果を人間の肉体と精神に及ぼすもののように見える」と、今から80年以上も前に、本質を突く指摘を行っている。

テキストのどの部分をとっても、味わい深く、かつ平易で読みやすい。何より短いのがいい！寺田の結論としては、「宗教は往々人を酩酊（めいてい）させ官能と理性を麻痺（まひ）させる点で酒に似ている。そうして、コーヒーの効果は官能を鋭敏にし洞察（どうさつ）と認識を透明にする点でいくらか哲学に似ている」ということで、「珈琲哲学序説」というタイトルの意味が、最後に明かされる。

つまり、「コーヒーを哲学する」「コーヒーで哲学する」「コーヒーの哲学をする」といった側面を含みつつ、「コーヒーこそが哲学なのだ」ということであろう。

岡倉天心の茶哲学と並んで、嗜好品の哲学を考えるとき、避けて通れない一篇である。現在は、青空文庫に収録されており、インターネットや電子書籍で、無料で読むことができる。

（了）

藤本 憲一／ふじもと けんいち●1958年兵庫生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。編集、広告、都市計画などの職を経て、現在、武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科教授。専門は情報美学、メディア環境論。主な著書は『ポケベル少女革命——メディア・フォークロア序説』（エトレ 1997）、編著として『テリトリー・マシン』（現代風俗研究会年報 2003）、共編著として鵜飼正樹・永井良和・藤本憲一編『戦後日本の大衆文化』（昭和堂 2000）など。論文は「茶の間と集い」（『日本人の暮らし——20世紀生活博物館』講談社 2000）、「コンビニ——人見知りどうしが集う給水所」（『無印都市の社会学』法律文化社 2013）、「スマートモブズ、ポケベル少女、ながらモビリズム」（『社会学事典』丸善 2010）など多数。

嗜好品文化研究

第1号
(2016)

特　集　嗜好品と香り

嗜好品と香り／嗜好品の香り　鈴木 隆
「香水男子」をめぐって―若い男性の香水使用行動の変化　斎藤 光
香りを食べる　山崎 寿美子
アートとしての香り―香りがいかにしてアートになりうるのか　岩崎 陽子
匂いについての考察　栗田 靖之
ワインのテイスティングとは―ワインの個性に近づくために　佐藤 陽一
嗜好品と香り[討論]第13回嗜好品文化フォーラム報告

論　文

啓蒙の飲料―フランス革命前後期のカフェの変容と「世論」の実態　橋本 周子
ブンとギシュル―イエメンコーヒーの過去・現在・未来　大坪 玲子
トリーノとジャンドゥイオット―都市と嗜好品が関わるとき　中島 梓
妊婦にとって〈嗜好品〉とは何か　大淵 裕美

研究ノート

▶ランク付けされる「食」―韓国ドラマに見る富裕層と貧困層　中田 梓音
▶北インド、ブンデルカンド地方のヒンドゥー既婚女性の装いと、その嗜好の背景　岡田 朋子
▶子ども向け化粧品とマンガ―女子学生へのアンケート調査からの考察　小出 治都子

書　評

10冊の本から見える、嗜好品世界の広がり　藤本 憲一

嗜好品文化研究会

研究誌　嗜好品文化研究　第1号（2016）

編集・発行　嗜好品文化研究会
［事務局］
〒604-0863 京都市中京区夷川通室町東入巴町83番地（株）CDI内
発行日　2016年3月31日
印刷　（有）ダイヤ印刷　無断転載禁止
頒価　1,000円（本体926円＋税）

©2016　嗜好品文化研究会
Printed and Bound in Japan　ISSN 2432-0862